

第1回 大学訪問 拓殖大学

留学生獲得・育成で、大学と海外進出企業との連携が必要

国境を越えた人、モノ、金の流れが加速している。円高の進行とTPP（環太平洋経済連携協定）への動きの中、海外に進出する日本企業の数が増え、日本国内での留学生育成が追いついていない側面が出ている。国内の日本語専門学校、大学、海外に進出した日本企業の間で、将来の労働力としての外国人留学生の獲得と養成をどうしたら良いのか、欧米に負けない魅力ある留学生受け入れ国になるには、何をなすべきなのか。留学生育成の最前線である全国の大学を訪ね、理事長・学長にインタビューを行う。第1回は東京の拓殖大学を訪ね、理事長、福田勝幸氏にインタビューを行って意見を求めるとともに、八王子キャンパスで外国人留学生4人と会い、それぞれの生活と夢などを紹介する。（聞き手は、全国日本語学校連合会主任研究員、牛久保順一）

◆1000人を超える留学生数

——本日は、拓殖大学と外国人留学生教育の問題について、広範囲に伺います。拓殖大学は、建学以来、国際化を目指して来られましたね。

「はい。明治33年（1900年）、台湾協会の付属学校として台湾協会学校が設立され、これが拓殖大学の前身です。1学年100人で、台湾語、北京語、英語のカリキュラムが3分の2、残りは法律、行政、地域研究等でスタートしました。大正11年（1922年）に、大学になりました。戦前は、卒業生の7割が、台湾、中国、朝鮮半島、東南アジア諸国に就職しました」

——戦後はどうでしたか。

「昭和36年にインドネシア賠償留学生を受け入れました。最初は留学生の日本語教育を担当し、その後、日本語研修所、留学生別科に発展しました。賠償留学生受け入れは、3年ほど続き、毎年97人ほどを受け入れていました」

——現在、拓殖大学は留学生の受け入れ数では、日本の大学の中で5位、31カ国から1000人以上の留学生が学んでおり、素晴らしい実績ですね。

「そうですね、学部学生では8%、1万人の中の800人くらいが留学生です。さらに大学院に163人、留学生別科に62人、全部で1000人を超えています」

——国別内訳は、どうですか。

「中国が多く、6割くらいです。次に台湾、韓国で、それ以外では東南アジア、中東、アフリカ諸国からです」

——学部別では、どこが多いのですか。

「多いのは国際学部で、毎年60人が入ってきます、次に商学部、政経学部、最近で多いのが工学部で、アジア各国でエンジニアが不足しているためです」

——就職は、いかがですか。

「以前はだいたい母国に帰っていましたが、近年は色々です。日本に残って企業に入る者、海外

の日本企業に就職する者、母国に帰る者、それぞれです。現地の日本企業に就職する者が3割おり、これが増えていますね」

◆ 貪欲な欧米への対抗策を

——日本全体として、留学生を獲得するための連携が必要なのではないのでしょうか。

「その通りです。米国、欧州、オーストラリアは、積極的にアジアの留学生を取りに来ています。これに対して、日本が一番弱い。国も大学も、これまで積極的にはやって来なかった。拓殖大学では、ポチポチ、やり始めていますけれど・・・」

——冷戦終結、世界規模での人口急増、関税障壁撤廃への動きと、最近では国境を越えて人、モノ、金が移動しています。TPP(環太平洋経済連携協定)はこの流れの一環で、避けて通れないでしょう。どうお考えですか。

「21世紀に入って早や10年が経過しました。この間、低迷する米欧経済とは対照的に、中国など近隣アジア諸国の経済成長は目覚しく、グローバル化の進展に伴い、我が国の優位性が揺らぎ始め、企業は海外に活路を求めて進出を余儀なくされています。今年6月にスタートした執行部は、この時代認識と本学100年の「建学の目的と理念」を検証した結果、我が国の未来を切り拓くためには、近隣アジア諸国との共存と、アジアの将来を担う人材の育成が不可欠であると認識するに至りました。拓大ルネサンス事業として、グローバル人材の育成の強化・復興と、文京キャンパスの発展的復興の2つの課題を推進いたします」

◆ 求められる海外企業と大学との連携。

——国際化の中で、人、モノ、金がグルグルと国境を越えて動く世界ですね。その中で、人が益々、重要になります。

「人、モノ、金というが、人があっての金、人があってのモノです。「人材を育てる」といいますが、人は材なののでしょうか。人は材ではなく人であり、この人に「材」という言葉はもう、使わない方がいいのかも知れません。人を育てること、このことが日本の、はたまた日本民族の生命であり、これを続けることが教育なのです」

——TPPへの動きの中、日本語が出来る留学生を育てることよりも、日本企業の海外進出の動きの方が早くなっているように見えますが・・・。

「その通りです。急激な円高などにより、日本企業の方から、日本国内ではやっていけない、海外に生産拠点を移すという動きが早く、大学での教育による人材育成が追いついていけない情勢です。大学も企業も、双方が連携しておらず、この波に、しっかりと対応できていません」

——では、どうすれば、良いのでしょうか。

「海外の日本企業と、日本の大学との間で、情報交換・連携がなさすぎますね。我々大学側も悪いのですが、日本の企業側もグローバル企業となったのですから、もっと大学教育の現場に目を向けていただきたい。企業と大学が双方にとって良い対応を取るべきでしょう。そういう連携がなければ、結果として、中国、韓国、欧州にアジアの留学生を取られて、押されてしまいます。何とかしなければ、なりません」

——企業と大学の連携は、国家戦略というものの一環となるのでしょうか。

「問題意識が大事なのです。これから、日本企業の海外進出は、一段と進むでしょう。企業、大学もそれぞれ、模索していますが、うまく対応できていない。お互い、何ができるかということをお話し合う、共通の場を、それぞれの立場で考えないといけない。個々の企業、個々の大学ではなく、日本全体として、きちんと対応して行かないといけない。日本勢が立ち遅れては、ならないのです」

◆ 充実した留学生支援

——拓殖大学での留学生へのサポート態勢を教えてください。

「大学の学部は、八王子キャンパスの留学生寮に 80 人、文京キャンパス近くの留学生別館に 60—70 人。そして 2 年前から高円寺に 30—40 人分の部屋を借り上げて、安い家賃で入れています。来年 4 月からは、八王子キャンパスで、外国人留学生と日本人学生共有で、1 ルーム 2 食付で月 5 万 8000 円の学生寮を造っています」

——外国の大学との間の交換留学生制度は、日本の大学の中でパイオニアでしたね。

「はい。相互に留学生を受け入れ、向こうでの授業料は、日本の学費の中でまかっています。長期留学生制度は、中国とはもう 30 年になり 10 人、カナダとも 30 年になり、台湾に 10 人、他にスペイン、メキシコなどの大学とも行っています」

——教育とは人を育てること、国際化とは国際化時代に対応できる国際人を育てること、大学への社会の期待は益々、大きくなっています。

「これからは、国内にいても、海外の人とビジネスが出来たり、言葉と環境の問題にも慣れる必要があります。日本は幸せの頂点の時代から厳しい時代となり、若者をトレーニングして鍛えないとなりません。日本人として留学生と交流したり、海外に出て行ったりと、体験教育が大事になります。私は大学経営が専門で、教育を育む環境を整えることがライフ・ワークです。拓大の卒業生なので母校を良くしたい、社会に役立つ人を数多く育てることが、課題であり、大きな夢なのです」

——長い間、ありがとう御座いました。

福田勝幸（ふくだ・かつゆき）



青森県出身

昭和 42 年 3 月 拓殖大学商学部貿易学科卒業

昭和 54 年 9 月 拓殖大学奉職

昭和 56 年 4 月 学生部茗荷谷学生主事室長

平成 3 年 7 月 学生部次長

平成 5 年 4 月 事務局学務部長

平成 10 年 6 月 事務局総務部長

平成 13 年 4 月 事務局長

平成 15 年 6 月 常務理事

平成 23 年 6 月 理事長

拓殖大学留学生 4 人の生活と意見

◆ ミャンマー発展の架け橋に

① コン・セン・ウエさん（ミャンマー、工学部電子システム工学科 2 年）



「日本のラーメンが大好きです」というウエさん（23）。ヤンゴン市中心街アローン地区に両親と妹（20）の 4 人暮らし。ミャンマー国立技術大学を 3 年生で中退して来日、東京・新大久保の日本語学校で 2 年間、日本語を勉強してから拓殖大学工学部に入学した。

——20 年後は、どうなっているのでしょうか？

「日本の企業で働いた後、ミャンマーで自分の会社を作っているかも知れませんね」。

既に日本語検定試験 3 級に合格。2011 年 12 月 4 日に 1 級試験を受験、英語検定試験 TOEIC も 800 点台を目指して受験するつもりだという。

ミャンマーは人口 5900 万人、長い国際孤立のトンネルから脱して開国に向けて大きく動き出している。2011 年 12 月にはクリントン米務長官が米務長官としては 56 年ぶりにミャンマーを訪問、野党指導者アウン・サン・スー・チー女史（66）と会談、ミャンマー支援を約束した。ミャンマーは 2014 年開催の ASEAN 首脳会議議長国となることが決定され、欧米などからの経済制裁解除への動きを強めている。

民主化と近代化で国を豊かにする機運が高まっており、求められるのが、高い技術を持つ有能な人である。

「私は回路の組み合わせ、ハードウェアの組み立てに興味があります。電気製品、パソコンの中にあるものです。パソコンのハードウェアの中の組み合わせを、もっと、勉強したいです。将来は、ミャンマーの人でも買える安くて品質の良いパソコン、通信ネットワーク、iPod、iPad など造りたいですね」。

——ヤンゴンのご自宅に入っている電気製品は、何ですか。

「テレビ、エアコン、冷蔵庫、洗濯機、それに CD、DVD 装置も全部ありますよ。ミャンマーの自宅にいて欲しいのは、インターネットのラインとパソコンです。ヤンゴンでは、パソコンは市内のインターネット・カフェに行かないと利用できません。日本ではインターネットは使い放題で月数千円程度ですが、ミャンマーだと年に何十万円もかかり、とても手ができません」

お父さんは民族服の小売店を経営、妹ヨン・ピッピ・ウエさん（20）は、2011 年 4 月から来日して日本語を習い始め、IT の勉強のため拓殖大学工学部を受験するつもりだという。都内のアパートで、ヨンさんと同居生活を送っている。

「日本の百円ショップやデパートでの買い物が好きですが、色々な商品が、1 つの場所に揃っていて、びっくりしました。都内を夜、歩いても、日本は本当に安全ですね」。

ミャンマーの国土は日本の1・8倍、その半分が森林で、チーク材、硬材などの森林資源が豊富で、天然ガス、レアアースに加えて、スズ、亜鉛、タングステンなどの鉱物資源にも恵まれている。元来がアジアのライスボウルであり、耕作可能な未開墾地は、日本の耕作面積とほぼ同じ面積という。また、ヤンゴンの月給は41ドル（3200円）と、タイの6分の1で、国民の識字率も高く、進出する日本企業にとって、東南アジアの一大投資フロンティアになると期待されている。

「ミャンマーはまだまだ、貧しいですが、電子システムをしっかりと学んで、国の発展に貢献したいのです。ミャンマーで、進出してくる日本企業で働きたい。日本の技術をミャンマーにしっかりと伝えて定着させ、国の成長・発展の架け橋になりたいのです」。

◆旅行代理店を経営したい

②ゲラツムチュク・オクサナさん（国際学部国際学科1年、ウクライナ）



「旅行が好きなのです。国際観光を勉強しに来ました。将来は、キエフか日本で旅行会社をつくりたい。そのために、色々と勉強したいです」

オクサナさん（25）の美しい表情が和らいだ。身長168センチ、スラリとし長身だ。

ウクライナで弁護士資格を取得した。2011年3月、首都キエフのキエフ国立大学を卒業した。都内の一戸建て民家にホームステイし、自室を与えられている。朝、晩は日本食、最初は戸惑ったというが、今では大好きになったという。

「ホームステイ先の日本のお父さんもお母さんもすごく、優しいです。朝は決まって、味噌汁にご飯です。好きな日本食は、お刺身、天麩羅です」

首都キエフに自宅があり、父親は貿易会社の課長さん、母親は専業主婦。二卵性双生児の妹イリナさんは、イタリアに留学中で、同じ国際観光を勉強している。

15歳の時から、両親が姉妹を世界旅行に連れて行ってくれた。

「ウクライナからは、イタリア、エジプトはとても近いのです。行った国は、たくさんあります。フランス、UAE、トルコ、ポーランドなどですね」。

日本に留学してからも、日本国内を旅行している。出かけた先は、京都、大阪、神戸など、2011年8月20日からは、拓大の旅行で大分県を訪れた。

「日本は四季があって、いいですね。春と秋が一番、好きです。春の桜、秋の紅葉は素晴らしいです。東京・中野通りの長い桜並木の桜、とても綺麗です」

キエフの自宅から北へ100キロちょっとの所にチェルノブイリ原子力発電所がある。爆発したのは1986年4月26日、オクサナさんが生まれる約1カ月前のことだった。4号炉の炉心熔解が起きて爆発、半径30キロ以内が居住禁止となり、16万人が移住を余儀なくされた。

2011年3月11日のツナミによる福島第1原発爆発事故は、「他人ごととは思えませんでした。自分のことのように、心配しました」と語る。

拓大八王子キャンパスと文京キャンパスでは、31カ国からの留学生982人が学んでいる。内訳は、大学757人▽大学院163人▽留学生別科62人で、中国が6割と多いが、欧米に加えて、韓国、台湾、東南アジア、中東、アフリカなど多彩だ。

国際学部、商学部、政経学部、外国語学部に加えて、最近では工学部が211人と増えている。982人のうち、女性は437人と45%を占めている。

「中国人が多く、ヨーロッパ人が少ないです。もっと、ヨーロッパからの留学生が増えて欲しいです」

スタラーテイサ（ウクライナ語で、頑張ろう）が好きな言葉。2011年12月の日本語検定1級を受験した。

「若いうちに色々と体験したい」というのがモットー。

「卒業するまでに、国際観光資格を取りたいです。日本をもっと知って、日本かウクライナで、旅行代理店が経営できるように、成長したい。拓殖大学はその夢を叶えてくれる大学で、本当に、来て良かったです」

ウクライナは人口4600万人。1991年に独立し、2004年のオレンジ革命などにより、民主化を押し進めている。日本からの直接投資は1億3000万ドル。日本企業33社が進出、ウクライナの在留邦人は216人、在日ウクライナ人は1507人と、友好関係が進んでいる。

弁護士資格を持ちながら、一からやり直しをして、あえて日本に学び、旅行代理店経営を目指すチャレンジ精神。夢に向かって、歩いている。

◆安全第一の日本製品に学ぶ

③アンガ・アシャリ・プトラさん（国際学部国際学科2年、インドネシア）



子どもの頃から、サッカーで遊ぶのが大好きだった。

「日本人は、一生懸命に仕事をします。インドネシア人はのんびりしていて、ちょっと違います。約束の時間にも平気で遅れますが、日本人は時間通りに、やってきます。もっと、日本人から学ばないといけないと思います」

八王子キャンパスの国際学部で、学んでいる。

ジャカルタの両親は、父親が電気部品会社課長、母親は、専業主婦。ジャカルタにあるシャープのパソコン製造工場働いている弟（22）が1人いる。

都内のアパートに1人住まい。

ジャカルタのペルサダ短期大学で3年間、日本語を学んで卒業。ジャカルタの運送会社（バス・タクシー・車レンタル）で技術職として1年働いた後、「将来はインドネシアで日本企業に勤めたい」

と思い、日本留学に踏み切った。

「そうですね、スポーツ部品関係の仕事がしたいです。サッカー、バスケットボールなど子どもが遊ぶ道具を作りたい。サッカーが好きだったせいかもしれません」

インドネシアには 8000 の島があり、人口は 2 億 3800 万人と世界 4 位。インドネシアにとっては、日本が第 1 位の貿易相手国であり、インドネシアからの輸出の 25・8% を日本が占めて 1 位、インドネシアへの輸入は 17・6% で日本が 3 位である。

1949 年にオランダから独立、スカルノ・スハルト・ハビビ・メガワティ大統領と続いて、現在は 2004 年からユドヨノ大統領の 2 期目である。民政移管に成功し、経済成長が目覚しく、2050 年には、人口で米国を抜いて世界 3 位になるといわれている。

1999 年に東チモール独立、2005 年にアチェ和平達成で、平和の機運が高まり、中間層の台頭が著しい。

2011 年 6 月 16 日、宮城県気仙沼市をユドヨノ大統領ご夫妻が訪問され、ツナミ被災者を激励した。アチェ津波(2004 年)、ジョグジャカルタ地震(2006 年)での日本からの支援への返礼の意味もあったのである。日本にとっても、インドネシアは最も友好的な国のひとつである。

「日本とインドネシア関係を学びたいです。将来はインドネシアに進出する日本企業で働きたい。そこで力をつけて、チャンスがあれば、自分の会社をつくりたい」

インドネシア語で、好きな言葉は「アヨ」(「さあ、来い」の意味)という。

「3 月 11 日の東北地震の時、高円寺を歩いていたら、地面が大きく揺れました。これほど揺れたのは、生まれて初めてで、びっくりしました。ユドヨノ大統領の気仙沼訪問はニュースで知り、本当に良かったです。日本とインドネシアはツナミと地震の同じ体験をしましたが、お互いに困った時に助け合うことが、何より大切なことだと思います」。

2012 年 4 月には 29 歳になる。大学を卒業するのは、30 歳を超えてしまうが、遅いということはないだろう。

「日本人のやり方は、色々勉強になります。日本製品は、安全が一番に重視されます。日本のブランドは、どうしたらお客さまに買っていただけるのか、商品にも工夫をして面白さ、珍しさを追求しています。本当に勉強になります」

◆ 日本語の勉強は毎日 10 時間

④アルドウスアリー・ファイサルさん(工学部電子システム工学科 3 年、サウジアラビア)



サウジアラビアの首都リヤド南 40 キロにあるアル・カルジュからやってきた。

父親は駱駝の飼育と販売の仕事をし、兄弟姉妹は本人を含めて 15 人(男 9 人、女 6 人)。ファイサルさんは第一夫人の子どもで、男 6 人のうちの 2 番目だ。

アル・カルジュにあるフランスの乳酸品製造会社「ダノン」に1年半勤務の後、奨学金として授業料全額政府支給の日本留学生に応募して合格、現在は3年生。

「エレクトロニクス、プログラミングの専門家を目指しています。ダノンで働いた時、タンクの中のものをコンピューターで出し入れするプログラミングの仕事をしたのですが、将来は石油・天然ガスのタンクの製品の出し入れを、コンピューターでプログラムする仕事につきたいです」とファイサルさん(29)。

「エンジニアになるため、大学を卒業したら、拓殖大学大学院に進みたいと思います。そこを卒業したら、日本で3年くらい働いて、学んだ知識を生かして、サウジアラビアで仕事をしたいです」

自分がサウジアラビアを代表しているという気概で、毎日、やっているという。日本人からいつも見られているという意識を持ち、「サウジの人間は素晴らしい」と思われるように、発言し行動しているという。見事な心構えである。

東京・高田馬場の日本語学校で2年間、日本語を学んで拓殖大学に入学したが、日本語の勉強には、熱を入れた。

「そうですね、1日、10時間は欠かさず、日本語の勉強をしました。ラマダン(断食月)の時だけは、少し減らしましたが、それ以外は、土曜日でも日曜日でも欠かさず、1日10時でしたね。休んでいても、テレビをかけておいて、お笑いタレントのお笑いを見て、勉強しました」

食卓には、和歌山県に住む日本人の友達が箱に入れて送ってきた紀州ミカンが置かれ、食べている。

「サウジアラビアには、夏と冬しかありません。日本の良いところは、季節の変化です。桜の春、紅葉の秋も好きですが、寒い冬も好きですよ」

サウジアラビアは人口2537万人。世界最大の石油埋蔵量を誇り、石油生産は日量820万バレルと世界1位。GDP3723億ドル、国民1人当たり所得は1万4807ドルと裕福である。石油・天然ガスの輸出先は日本、米国、中国など、輸入は米国、中国、独、日本などからだ。

だが、石油への過剰な依存からの脱却も模索。9・11米中枢同時多発テロ(2001年)で、米国民の間で、アラブとりわけ、サウジ警戒色が強まり、最近ではサウジから米国への留学組が目先を変え、日本を含めるアジアへ留学先をシフトしてきている傾向が見られる。

サウジ王室にも変化の兆しがある。2011年10月22日、サウジNo.2・スルタン皇太子が80歳で逝去し、後任の皇太子にナイフ内相が就任、国防相にはサルマン・リヤド州知事が就任した。

脱石油の要の1つが、外国に学んだ留学生だ。全額国費でまかなう留学生奨学金制度にサウジの並々なら決意が現れており、人の育成こそ、繁栄の礎だという認識がある。

ファイサルさんのベドウィン(アラブ遊牧民)の血を引いた熱い情熱と気迫に、サウジの脱石油・近代化への大きな変化・意気込みが読み取れる。